

では、聖書 66 巻のイエス・キリストというシリーズで今日は 3 回目で、新約聖書に入っていきたいと思っています。まず初めに、マハトマ・ガンジーの言葉を紹介したいと思っています。彼はこういったことを言っています。「私の生涯に最も深い影響を与えたのは新約聖書である。」何故かと言うと、ガンジーは皆さんも知っての通り、イエス・キリストに魅了されて、イエス・キリストの説いた『山上の垂訓』『山上の説教』というものを正に地で行く。それをそのまま自分の生き様にして、そして体現していくということを目指したわけです。そして彼は偉大な業績もそれによって成すことが出来たわけですが、新約聖書の中にはそのイエス・キリストの生涯が直接言及されているわけです。旧約聖書は直接的というよりも、間接的に、中々聖書の知識がなければ、普通一般的に信仰者でない限りは、旧約からイエス・キリストを知るということは、難しいと思います。でも、新約聖書であれば、ガンジーのようなクリスチャンじゃなくても、彼は一応は、形だけヒンズー教徒でありましたけれども、でも彼が最も愛したのはイエス・キリストという神でありました。でも、クリスチャンになったかどうかは定かではありません。

もう一つガンジーが言っている言葉で「イエス以上に人類に貢献した人を私は知らない。実際キリスト教には何の悪いところもない。問題はあなたがたクリスチャンにある。あなたがたは自分たちの教えに従っているとは到底言えない。そして私はキリストは好きだが、クリスチャンは嫌いだ。」と、そういうふうににガンジーは言っています。残念ですね。神様はクリスチャンが大好きです。私たちのような者を神は愛して下さい、私たちを大好きだと言って下さる方ですが、でも、ガンジーはイエス・キリストを信じていませんでしたから、神の家族・主にある兄弟姉妹ではなかったので、キリストは尊敬して止まななかったんですが、いわゆるクリスチャン、特に西洋のクリスチャンたちは形骸化したキリスト教の、ほとんど宗教というよりも文化のような、カルチャーのようなかたちで、形ばかりのそういう信仰には失望していたわけです。名ばかりのクリスチャンは嫌いだと言ったわけですけれども、本物のクリスチャンに出会えなかったのは残念であります。

で、マザー・テレサもこれについてこう言っています。「ガンジーはキリストのことを知った時、興味を抱きました。しかし、キリスト信者に会ってがっかりしたそうです。キリストに近づこうとしている人たちにとって、キリスト信者たちが最悪の障害物になっていることがよくあります。言葉だけきれいなことを言って、自分は実行していないことがあるからです。人々がキリストを信じようとしない一番の原因は、そこにあります。」中々イエス・キリストを信じようとしない、クリスチャンになつてくれない、ということで皆さんの中にも苛立ったり、非常にがっかりして残念な気持ちになっている人もいると思います。もうすっかり失望して、諦めてしまっているという人もあるかもしれませが、特に自分の身内であったり、長年付き合いがある親しい友人とか、もう何年も何十年も福音を宣べ伝えてきているのに、ちっとも信じてくれない。で、大抵の理由は、マザー・テレサが指摘している通り、キリスト信者たちが最悪の障害物になってしまっている。もっと言えば、あなたが障害物なので、私が障害物になってしまっているので、中々自分の周りの人たちが素直にイエス・キリストを信じてくれない。それが現実かと思います。勿論それぞれが神様と向き合って、自由意志をもって神に心を開いて、キリストをその心の王座に迎え入れるかどうか、それは外からの圧力だとか説得によってなされることではありませない。その人が最終的には決断しなければいけないことですが、その決断を鈍らせるとか、迷わせたり、或いは全く否定的な決断を促してしまうような要因となることが多いです。それがクリスチャンという最大の障害物。残念です。キリストに似ていないクリスチャンを世の中からすべて排除したら、どれほど宣教が進むだろうかと、そういう

趣旨のことを言った人がありますけれども、皮肉な話ですけれども、ただこのことを私たちが肝に銘じながら、今私たちはクリスチャンと自称はしているかもしれませんが、本当に周りの人が自分たちを見て「この人はいつもイエス・キリストのことを語り、いつもイエス・キリストがどれほど素晴らしいか、どれほど偉大な方か証しして、そしてこの方を一番にしている、一番愛している。だから、この人はクリスチャンに違いない。」と、自分の口ではなくて他者の口から「この人はもうクリスチャン以外の何者でもない。」と、「朝から晩までキリストのことばかり。もう言うこと成すこと、キリストに結びつける。」そう言われたら本望ですし、本物であります。でも、クリスチャンと自称しながら「この人の口からは一度もキリストについて聞いたことが無い。」とか、「この人を見ていても全然イエス・キリストが見えてこない。」なんてことを言われたら、もう目も当てられないほど残念なことです。そのことをまず冒頭に皆さんにチャレンジして、そしてあらためて新約聖書の中からイエス・キリストがどんな方か、そしてイエスを信じると、主の弟子となった私たちはどうあるべきなのか、ということも含めてこのスタディーを捉えて頂きたいと思います。

で、今から見る新約聖書、これは 27 巻から成っています。聖書全体では 66 巻で、旧約が 39 巻ですから、新約聖書は旧約聖書の三分の一位の内容でありますけれども、その 27 巻それはイエス・キリストが実在したことを証明しているひとつの書物であります。新約聖書はフィクションではありません。ノンフィクションです。神話ではなくて、実話であります。史実に基づいた列記とした歴史書であるわけです。どっかの時代の古代の人たちが作り上げた創作とか寓話とかそういったファンタジーの作品ではなくて、歴史に基づいた書物であって、新約聖書以外からもイエス・キリストの実在というものは証明できます。イエス・キリストの実在を証明する第一のテキストが、第一級の資料が新約聖書であることは言うまでもないですが、新約聖書がなくてもイエス・キリストの歴史的な実在性・史実性というのはいくらでも証明できるほど豊富にあるということです。考古学とか歴史学とか或いは新約聖書そのものに関する文献学とか書誌学といった学問も、それに伴って発展してそれらの学問によってもイエス・キリストが実在したということは証明できるわけです。ですから私たちはそういう書物を今取り扱おうとしているということを感じて頂きたいと思います。一番大切なのはイエス・キリストが実在した方で、実際にイエスが行なったこと一つ一つそれはリアルなもの、本当に起こったことです。ですから、信じるに値するということです。それが本当ならば、私たちは決断しなくてははいけません。嘘だったら、作り話だったら、どうでもいい話です。信じようと信じまいとその人の好き勝手に話が済まされてしまうんですけども、でも本物の人物で、本物の実際にここに書かれている、聖書に書かれている通りのことを言われ、教え、そしてなされたというならば、それに対して私たちは応答しなくてははいけません。信じるか、信じないか。どちらでもいいということではありません。その決断が私たちの未来を、永遠を左右することになるという、これは人間が決断する数多ある決断の中で、最も大切な決断となります。最も重要な決断、それはあなたの未来に、永遠に関わることです。そのために新約聖書から詳しく知って、もちろん新約聖書そのものが信頼に値するものだということも確信しなければいけません。本当かどうか、新約聖書がそれだけ確かな書物だということも確信できないと、中々信頼するわけにはいかないわけです。で、その話から前置きとして伝えたいと思いますので、ちょっと退屈に聞こえるかもしれませんが、是非新約聖書がどういう書物なのかということをご皆さんも確認して頂きたいと思います。

まず、聖書考古学者で不世出の天才として名高い、この人はウィリアム・オルブライトという人なんですけれども、考古学の世界ではその名を知らない人がいない位有名な人です。この人は、「**新約聖書は全てほとんど弟子たちがまだ生存している間に書かれたものだ。**」というふうに結論付けています。新約聖書は後代になってから、イエスが死んでから何百年経ってから、後から作られた創作物語というのではなくて、実際にキリストの弟子たちが生きている間に、その弟子たちによって書かれたものだ。で、オルブライト

トはこう言っています。「どの書も、(新約聖書 27 巻のどの書も) AD80 年以降に書かれたものとする根拠が無いことは誰もが認めるはずでしょう。これでも最近の新約聖書批評者が言っている AD130 年、150 年からは二世代も前です。」AD80 年以降に書かれたとする根拠はないということ。イエス・キリストが実在されていたその時代というのは、AD30 年頃まで。正確には AD32 年にイエス・キリストは十字架に掛かって死んで、そして葬られて、天に上げられたわけです。それから弟子たちが復活のキリストに出会って、イエスを主と心で信じ、口で告白して、救われて、そのイエス・キリストのことを聖書を使って力強く証して、全世界に福音を携えていったわけです。その間に聖書というものが編纂されていくわけですが、それが AD80 年以内に、イエスが天に上げられてからはもう 50 年以内に新約聖書は既に大体殆どが完成していたと。ただ厳密に言いますと、ヨハネの福音書、ヨハネの手紙第 1、第 2、第 3 ならびにヨハネの黙示録、これに関しては 90 年台から 100 年にかけて。なぜならばヨハネがまだその時代に生きていたからです。ヨハネ以外の弟子たちは殆ど殉教しておりますので、ヨハネだけは 100 歳位まで生きて、晩年に福音書、そして手紙・書簡、さらには黙示録を書いたと言ってますから、それ以外であれば 80 年以内に新約聖書はすべて完成していたということです。

で、もう一つ、懐疑的なことで知られている学者で A.T.ロビンソンという人が新約聖書の成立年代について、伝統的な学者たちが言っているよりも、実は早い時期だと主張しています。懐疑的な人でも最近では新約聖書はそんな昔に書かれたものじゃないと。で、A.T.ロビンソンが書いた本で『新約聖書の年代再推定』というものがあるんですが、そこで新約聖書が AD40 年と AD65 年の間に書かれたと主張しています。この人は懐疑的なことで知られている学者です。AD40 年、ですからキリストが死なれてからももう 10 年以内に早いものは書かれて、遅くても 65 年の間に殆どのものが書かれている。さっき話した通りヨハネによるものは例外としても、それ以外は AD65 年以前に既に完成していたということです。

で、もう一つ引用を紹介したいと思います。ジョン・ウォーリック・モンゴメリーという人の聖書学者の言葉です。「現在の新約聖書は元のものとは異なるというなら、すべての古典を否定することになる。というのは、新約聖書ほど書誌学的な信憑性が確立されている古文書は無いからである。」と。新約聖書と言っても今私たちが手にしているのは、日本語に翻訳されたものです。で、新約聖書は元々はギリシャ語の話し言葉でコイネーというギリシャ語で書かれていたもので、でもそれは原本としては残っていないわけです。その原本を書き写した写本が残っていて、その写本を基にそれぞれの言語に翻訳されて、それが現代の私たちの手にあるわけです。ですから、原典というものは存在しませんけれども、写本というものはあるわけです。で、その写本と原本との間に随分違いがあると。ですから新約聖書は信じるに値しないというようなことを、もし主張するとするならば、その他のすべての古典は、古文書は全く信じるに値しないと。何一つ信じるものは無いと言っているんです。つまり言い換えれば、新約聖書ほど信憑性の高い古文書は無いということをモンゴメリーは主張しているわけです。

で、同じラインでノーマン・ガイスラーという人も、この人も有名なキリスト教の弁証論者であります。「新約聖書は他のどの古代文献よりも多くの写本が残っているだけでなく、その内容も 99.5%が原本に限りなく近い形で残されている最も信憑性のある本である。」と。99.5%が限りなく原本に近いと。それはもう殆ど書誌学的に言いますと、100%に近いということ、そんな正確なものは他に古文書の中には無いということです。

で、もう一つラビ・ザカリアスという現代一番世界で有名なキリスト教の弁証論者のひとりです。彼も同じようなことを言っています。「写本の多さ、実際の出来事とその記録との時間差、その内容を賛否両面から論ずる文献の多種多様さなどの点で、新約聖書の本文ほど正確に伝わってきたものは他にない。これほどの写本の数と正確さを誇る古典はないのである。」ちなみに、新約聖書の写本の多さ、とありますけれども、それは随一で飛び抜けていて、5686 個。それ以上どんどん増えているわけですがけれども、それに加

えて、それはギリシャ語の写本なんですけど、ラテン語のブルガタ訳というラテン語の最も古い古代訳の写本も 10000 点以上あります。さらに他の古代訳の写本も断片も含めると、25000 以上あります。で、その古代訳というのは 3 世紀から 6 世紀に書かれたもので、殆どが 3・4 世紀に集中しているものです。ですから、25000 もの信憑性の高い写本というのが新約聖書には存在するという事です。

で、時間差というのが言われてました。実際の出来事とその出来事を記録した記録文書との時間差、それが短いと言ってるんですが、先程の懐疑的な学者で A.T.ロビンソン曰く“最短ではもう 7 年”たった 10 年以内です。そういう例もありますけれども、でも大体一般的には 50 年以内には殆どキリストが天に上げられてから 50 年以内には新約聖書は完成していたと。で、これは極端に短いです。後で他のものも紹介したいと思いますけれども、もう一つ写本の正確さを皆さんに確認して頂きたいこととして、事実をいくつか取り上げたいと思います。

それは写本ではなくて、写本の正確さを裏付ける他の文献で、それは初期の教会教父たちの文献であります。教父というのは、教える父と書きます。英語では church father と言います。その教会教父という人たちはイエス・キリストの弟子の弟子、孫弟子みたいな人たちのことを言います。古代キリスト教会の牧師だったり聖書学者、霊的指導者のことを言います。そんな彼らのことを教父といいます。その教父たちが沢山新約聖書から引用して、それが文書になって残っております。たとえば、その教父の新約聖書の引用だけでも新約聖書は作り上げることが出来ると言われていたくらい、数が多いということをまず覚えて頂きたいと思います。例で言いますと、その初期の教会教父たち、殉教者という肩書きを持っているユスティノスという人、このユスティノスは大体 AD133 年頃殉教したと言われてますが、2 世紀の人です。この人は福音書から 268 回引用しています。使徒の働きからは 10 回。パウロの書簡から 43 回。そして共同書簡と呼ばれるもの、これは〇〇の手紙というのが、ヨハネとかヤコブとかユダとかありますね。それらの共同書簡、後で説明しますが、パウロの書簡以外のことを言います。で、それが 6 回。黙示録から 3 回。間接的な黙示録からの引用は 266 回あると言われてますが、全部で 330 回ユスティノスは新約聖書から引用しています。それは少ない方です。

続くエイレナイオスという人は AD130 年から AD200 年頃の教父ですが、この人は福音書から 1038 回引用しています。使徒の働きから 194 回。パウロの書簡からは 499 回。共同書簡から 23 回。黙示録から 65 回。合計 1819 回引用しています。

そんな感じでアレキサンドリアのクレメンスという人は AD150 年から 212 年の人で全部で 2409 回引用しています。

で、オリゲネスという人、この人も有名な教父です。この人は AD185 年から 253 年の人ですが、全部で 17922 回新約聖書から引用しています。特に際立つのが福音書からは 9231 回引用しています。パウロの書簡からは 7778 回も引用しています。

で、テルトゥリアヌスという人は AD160 年から 220 年の人で、この人は合計 7528 回新約聖書から引用しています。

そしてヒュポトリスという人は AD170 年から 215 年の人で、合計 1378 回引用しています。

で、エルセビオスという、教会博士という人です。この人は AD260 年から 340 年頃の人です。この人は合計 5176 回引用していて、今取り上げた教会教父たち、合計すると 36289 回も新約聖書から引用しています。彼らの引用を集めただけでも新約聖書は成り立つぐらい十分です。それだけの豊富な資料があるということです。

で、それプラス聖句集というのがあります。聖句集というのは初代教会の時代、当時教会で礼拝の中で新約聖書が朗読されたんですが、その朗読箇所をまとめた聖句集となるわけです。公同の礼拝で公に読み上げるといって、そういう聖句をまとめた聖句集というのがありまして、それは旧約の時代にユダヤ教でも

そうなのですが、礼拝の中で聖書を朗読するわけです。で、新約聖書も同じようにして初代教会によって公の礼拝の中では朗読されるということをしていたわけです。で、その聖句集の数というのが 2396 個あります。これは 6 世紀から 8 世紀のものでありますが、その聖句集の言葉が古い言葉を使っているんです。ですから、これは何を意味するかと言いますと、極めて初期の時代の文体で、それが書き換えられることが無かったと。時代を経ると段々言葉が変わってきます。日本語もそうですけれども、皆さんが若い頃と今では全然言葉遣いが変わったり、言葉の意味も変わったりするわけです。昔はそういう意味で使っていない言葉が、今の時代若い子たちは全然違う意味で使ったり、“ヤバイ”とか言いますけれども、若い人たちが“ヤバイ”と言うのと、皆さんが“ヤバイ”と言うのと全然違う意味になりますので、まあそういう形で 6 世紀 8 世紀になったら 1 世紀の時代とはちょっと言葉遣い、意味合いも変わるわけです。語彙も増えたり或いは減ったりするわけです。でも、その聖句集に関しては古い言葉が、1 世紀のその時代の言葉が残っているので、それもまた新約聖書を、その聖句集をもって編み出すことも可能なぐらい豊富に存在しているということ。その辺を皆さんに是非覚えて頂きたいと思います。

で、そういった教会教父たちの引用は、全部で今冒頭に挙げたのはほんの数例というものなのですが、他にも沢山、ローマのクレメンスと言う人、AD95 年の人です。ポリカルポスという人とか、この人はヨハネの直弟子です。この人は AD70 から 156 年の人です。或いはアウグスティヌスという人も皆さん知っていると思います。ラクタンティウスとか、クリストストモスとか、ヒエロニムスとか、アナスタシオスとか、ミラノアンブロシオスとか、ニュッセノグレゴリオスとか、いろんな教会教父たちがいますが、彼らは一様に新約聖書から引用していて、その合計が確認できているだけで、86489 存在します。ですから、これだけあれば新約聖書は最も信憑性の高い古代文書で、実際の出来事と記録された時間との時間差も大変短いということです。

で、この辺で難しい話は後にしたいと思いますけれども、とにかく皆さんにお伝えしたいことは、新約聖書の 27 巻、それはイエス・キリストが実在したということを証明しているんですが、新約聖書自体が信憑性のない書物だったらそのように断言は出来ないわけです。でも、新約聖書がどれだけ信憑性の高いものかということを知ることによって、間違いなくイエス・キリストが実在したということも証明できます。残念ながら、現代においても未だ無知な人たちは、イエス・キリストは架空の人物だと思い込んでいる人たちが意外と多くいます。皆さんの周りにもそういう人がいると思います。イエス・キリストが歴史上の人物だということを知らない人たちが結構います。ですから、日本の歴史でも昔は聖徳太子とか実在の人物として習ったと思いますけれども、今聖徳太子が実在の人物かどうか怪しいと言われていて、<sup>うまやどの</sup>厩戸皇子だとか言われていますが、あまりにもイエス・キリストに似ているので、馬小屋で生まれたとか、処女から生まれたとか。それは、イエス・キリストの伝承に大きく影響を受けたものだと言われていています。そういう架空の人物だとか、或いは実際にいたかもしれないけれども、いろんな伝説によって全然違った人に作り上げられて、英雄視されたり、聖人化されたり、或いは神格化されてしまって、もうそれは信憑性のないものだと片付けてしまう人がありますけれども、イエス・キリストに関しては絶対にそうではないということを知って頂きたいと思います。

これはウイリアム・ビーダウルフというアメリカの伝道者の言葉です。19 世紀から 20 世紀にかけてアメリカで活躍した伝道者ウイリアム・ビーダウルフという人の言葉なんですが、とても面白い言葉ですから紹介させて頂きたいと思います。「新約聖書を読んでも、キリストが神だと証言していることが分からないという人は、雲一つない真昼に、空全体を見渡しても、太陽を目にすることが出来ないであろう。」そのくらい自明の理だということです。

で、もう一つはイギリスのマンチェスター大学の聖書学者で、F. F.ブルースという人、大変有名な人です。この人は「物書きの中には、キリスト神話を唱える者もある。しかし、知的証拠に基づいてのこと

ではない。客観的に判断する歴史学者にとってキリストの史実性はユリウス・カエサルの史実性と同じくらい自明である。キリスト神話説を広めているのは、歴史学者ではないのだ。」実際にユリウス・カエサルの書いた『ガリア戦記』というのがありますけれども、それは BC100 年から BC44 年のものと言われております。その写本も残っているんですが、その『ガリア戦記』皆さんも歴史では聞いたことがあると思いますが、最古の写本は AD900 年です。実際には BC100 年から BC44 年の話が、AD900 年頃の写本しか残っていないわけです。時間的距離というのは約一千年あるわけです。一千年前のことを書いているものを中々信頼せよと言われても、しかもその写本の数というのはたった 10 個しかありません。ですから、新約聖書の写本の数とか、時間的な距離の短さを考えたら、もう比較にならないくらいです。でも今ユリウス・カエサルが歴史上の人物だということを認めない人はいないと思います。皆歴史上の人物だと口を揃えて言うと思います。でも、イエス・キリストはそれ以上に間違いなく歴史におられた方。正に英語でいう“ヒストリー” history というのは、His story です。イエス・キリストの物語と言って良いくらい。事実イエスの誕生を機に、キリスト誕生前は BC と言います。キリスト誕生以降は AD、ラテン語で Anno Domini と言います。これは“主の年”という意味です。

「真の学者でイエスの歴史的存在を疑うものはいない。」とオットー・テッツという学者も言っている通り本物の学者であれば、イエス・キリストの歴史的存在を疑う人はいません。学者でなければ、好き放題評論家は言いますが、でも、実際に歴史を知っている者は、学んでいる者は、イエス・キリストが歴史上の人物だということは疑いようもないことです。もう一つ言いますとアレキサンドロス大王も皆さん知っていると思います。アレキサンダー大王とも言います。彼が東方遠征をした、もう世界の殆どを支配して手中に収めたということは、皆さんも知っていると思うんですが、それがどうして分かるかというのと、古代文書からそのことを知るのですけれども、その数というのはたった 5 個しかないんです。たった 5 つの古代文書からアレキサンドロス大王の実在性と彼が東方遠征をしたということが記録されてるんです。それが本当かどうかというのは、確実に言えないわけです。もちろん考古学的な遺物も資料としてあるわけですが、でもイエスのそれと比べたら全く比較にならないわけです。アレキサンドロス大王が死んでから 400 年後にプルタルコスという人が書いた『アレキサンドロスの生涯』という、それが最初の記述であります。400 年後でありますから、大分尾ひれが付いたと思います。いろんな伝説が勝手にそこにくっついてしまったと思います。膨れ上がったと考えて良いと思います。大体の英雄伝というものは、そういうものであります。で、このプルタルコスとか、他の著者たちがアレキサンドロス大王の時代から数百年後にいろんなものを、歴史物語というよりも多分殆ど作り話といって当時の読者たちを喜ばせるように書いたと思われまいますが、そういったものが数限られている、ほんの僅かであって、殆どが大体どういう人物だったのか想像するしかないというものです。でも、イエス・キリストについては、そのような想像は必要ありません。極めて正確にイエス・キリストがどのような人物だったのか、どういう思想を持っていたのか、どういうことを行われたのか。その言動も一つ一つ詳しく知ることが出来ます。ということで第一級の資料は、イエス・キリストに関してはまず新約聖書をあげなければいけません。

で、その新約聖書を今から皆さんに開いて頂きたいと思います。まずマタイの福音書から全部で 27 巻ありますので、サラッと 27 巻の中から皆さんに見て頂きたいと思います。そして、もう一つここに一冊の本があります。『早わかり聖書ガイドブック』という本で、これは英語の原書ですと”What bible is all about for young explorer”ですから、若い探求者たちへの、どちらかと言うとこれは日本語でも中高生向けに書かれています。聖書はどのような本ですか、ということを中高生が学ぶのに非常に適している、よくまとめたガイドブックだと思います。この中に、新約聖書に限定してのことなんですが、それぞれの 27 巻の中にイエス・キリストがどのように描かれているのかということをもとめたコーナーが付いています。残念

ながら旧約聖書の中の 39 巻の中のキリストというコーナーはないので紹介できないんですが、でも新約聖書 27 巻に関しては、たとえば“マタイの福音書の中のキリスト”という見出しでまとめがあるので、それは非常に参考になると思いますので、この時間も取り上げて皆さんにご紹介したいと思います。

で、そのマタイの福音書から始まって、マルコの福音書、そしてルカの福音書、ヨハネの福音書。これが最初にある 4 つの福音書です。で、そのマタイの福音書は、“ユダヤ人の王としてのキリスト”が描かれています。そしてマルコの福音書は“しもべとしてのキリスト”が描かれています。ルカの福音書は“アダムの子としてのキリスト”。ヨハネの福音書は“神の子としてのキリスト”が描かれています。で、最初の三つ、マタイ、マルコ、ルカは『共観福音書』ともよく言われます。共観というのは共に観察するという共観です。何故かと言いますと、マタイの福音書とマルコの福音書とルカの福音書には沢山重複している記事がある。同じようなことを言っている内容、一致している部分があると。それをたとえば全部 100 という数値で表すとしますと、マタイの福音書は、マタイ・マルコ・ルカで一致しているのは 100 の内 58。相違している独自の記事が 42 あります。マルコの福音書は 93 は一致しています。ですから、マルコの福音書を読むと大体マタイとルカの内容が全部そこに織り込まれています。だから福音書の内容をどんなものか知りたければマルコの福音書を読めば、大抵分かります。93 の一致。相違しているのは 7 つだけです。マルコ独自の記事は、ユニークなのは 7 つだけ。ルカの福音書は、これは一致しているのは 41 です。相違している独自の記事は 59 あります。でも、一致している点が半数弱なので、これは『共観福音書』に含まれるわけです。

一方でヨハネの福音書は、これは『共観福音書』とは呼ばれません。なぜならば、一致しているのは 100 の内たった 8 つです。つまり残りの 92 はオリジナルということです。ヨハネにしかない記録です。マタイにも、マルコにも、ルカにもないそういう記事がヨハネの福音書には全部詰まっています。ですから、これは独立した福音書と。でも 4 つあるので四福音書と言うわけです。もちろんそれはイエス・キリストの生涯を綴っているもので、それが共通のテーマであることは言うまでもないです。

で、この『イラスト早わかり聖書ガイドブック』という本によりますと、マタイの福音書の中のキリストはこうあります。『神はアブラハムに「地上のすべての民族は彼によって祝福される。」(創世記 12:2~3 アブラハム契約として有名なところ。)]と約束されました。イエス・キリストはアブラハムの子孫です。(マタイ 1:1 系図に出ています。) イエスはまたダビデの子孫と見なされています。(これもマタイ 1:1 に、冒頭に出ってきます。) 神の約束のすべてがイエスを通して真実となりました。マタイの福音書ではイエスは王として表現されています。イエスはすべてのものの上に権威をもっておられます。イエスは罪を赦し、病気をいやし、人々から悪霊を追い出すことがお出来になります。イエスは死に打ち勝つ権威さえももっておられます。墓はイエスを閉じ込めることが出来ませんでした。イエスがあなたのために何をして下さったかを思い出して下さい。イエスはあなたのために死んで下さいました。このことについてもっとよく知りたいと思う時は、この本の最後の章を調べて下さい。そこでは、どのようにして神の家族の一員となるかを知ることが出来ます。』ということが書いてあります。

マタイ 2:2。そこで東方の博士たちがエルサレムにやって来てイエスを拝みに来ます。この東方の博士たちというのは 3 人とは書いてありません。複数形ではありますけれども、3 人とはどこにも書いてありません。彼らが三つの贈り物をイエスにささげるので、“3 人の博士たち”と昔から伝統的に云われて、いろんな絵本だとか、紙芝居だとか、みんな三人で出てくるわけです。でも、聖書には 3 人とは書いてありません。黄金、乳香、没薬という三つの贈り物はささげられましたが、だからと言って 3 人とは言っていない。300 人だったかもしれません。三千人だったかもしれません。でも、複数形であるから、一人で

はないことは明らかです。で、彼らがちょうどイエスに出会ったのは、イエスが誕生してから二三年経ってからです。赤ちゃんの時ではないです。だからこれも誤解しないで下さい。赤ちゃんのイエスに遭遇したのは羊飼いたちであって、博士たちではありません。これは時間差があります。ですから、まず**ルカの福音書**には、羊飼いたちが最初にクリスマスの知らせを聞いて、産まれたての新生児のイエスに出会います。そしてイエスをそこで礼拝するわけです。東方の博士たちはそれから数年経ってから、場所を変えて、そこはもう家畜小屋ではありません。馬小屋とも聖書には書いてありませんが、家畜のいた場所だということは明らかです。恐らく洞窟かなんかだったと思いますが、**マタイ 2 章**では、ここは家です。ヨセフとマリヤの家に東方の博士たちがやって来たわけですから、そこで言ったのは『**ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東のほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました。**』ユダヤ人の王を礼拝しに来たというのが、東方の博士たち、バビロン今のイラン・イラクから来た人たち、1500km もずっとラクダか何かに乗って、数ヶ月かけて命がけでやって来たわけですから。二三歳の子供を拝みにわざわざそれだけの時間と労力と犠牲を払ってリスクをかけてやって来たわけですから。それが礼拝というものです。赤ちゃん、小さな二三歳の子供に何か礼拝なり、或いは高価な贈り物を与えて見返りが求められるかといったらそうじゃないですね。黄金、乳香、没薬。黄金は王として相応しい贈り物です。乳香は祭司が使うもので、没薬は死者につける防腐剤です。王であるキリスト、そして祭司であるキリスト、そして死ぬ運命にある預言者としてのキリスト。それが油注がれた者、王・祭司・預言者です。相応しい贈り物を用意したんですが、それをイエスにプレゼントしたからといって、博士たちはイエスから見返りを求められたか。二三歳の赤ちゃんから何かお褒めの言葉をもらうとか、何か見返りが物としてもらえるかと言ったらそうじゃないですね。でも、礼拝とはそういうものです。見返りを求めてささげるものではありません。そして、それだけ価値のある方、イエス・キリストとは命をかけて礼拝しに来るだけに値する方だと。そして、一切見返りを求める必要もないお方です。なぜならば、イエスはすべてを持っておられるからです。でも、そのイエスに何か感謝の思いとか、そのイエスをほめたたえる何かの目に見える形でそれを表現したいというその気持ちが礼拝行為の中に含まれてくるわけです。

そして、**マルコの福音書**は“しもべであるイエス・キリスト”を描いていると言いましたが、**マルコ福音書**の中のキリスト、これについてはさっきの本の中には**マタイの福音書**の中のキリストしか描かれていなかったから、**マルコ 10:45**を見て、しもべとしてキリストを見て頂きたいと思います。イエスの言葉です。『**人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。**』イエスは仕えられるためではなくて、仕えるために来られました。つまり、しもべとして来たわけですから、**マルコの福音書**にはイエス・キリストの系図というものはありません。マタイにはイエスが王として描かれていますから、アブラハムの子孫、ダビデの子孫という立派な系図がまず冒頭にあります。でも、**マルコの福音書**には系図がありません。奴隷には系図が要らないからです。で、イエスが仕えられるために来たのではなくて、仕えるために来られたのであれば、イエスの追随者である、イエスの信奉者でありイエスの弟子である私たちは、当然のことながら仕えられる者であってはいけないということです。常に私たちも師匠に倣って、主に倣って、仕える者でなければなりません。そのような教えが**マルコ 10:45** です。それをまずイエスが模範を示されたので、弟子はそれに従うということが簡単に出来るわけです。言うことは言うけれども、実際に言った通りのことを教えている者がしていないということであれば、だれも従ってきません。子供が何故あなたに従わないのか。それはあなたが言うことは言うんだけど、言った通りあなたがしていないので、子供はあなたを尊敬しないので、あなたに聞き従うことをしません。平気で逆らいます。言っていることとやっていることが違うというところを見ているからです。でも、イエスに関してはそうではないで

す。イエスは教えた通りのことをまずご自身が率先して模範として残されて、私たちはですから何の言い訳もせず、イエスがそうされたんだから、しかも私のために、あなたのためにそうされたのだから、私たちは喜んでそれに倣うことが出来ます。ですから、教会に来て、仕えられるためにあなたが何か周りの人に要求したり、声をかけてもらおうとか、相談にのってもらおうとか、何か力になってもらおうとか、祝福してもらおうとか、何かをもらうつもりで、してもらおうつもりで教会に来ているならば、あなたはもはやイエスの弟子ではないと言えるでしょうし、そういう者はいつまでたっても幸せになれません。なぜならばイエスは「受けるよりも、与えることのほうが幸いだ。」とおっしゃってるわけです。正にイエスがそのことをなさったわけです。「与える者こそが幸いである。幸福である。」と。受けることももちろん悪いことじゃないですけども、でも受けるよりも、与えることの方が幸いであります。

そしてルカの福音書は、アダムの子。人間の子供であるということです。イエスは100%神であり、100%人間です。ルカ 3:38『エノスの子、セツの子、アダムの子、このアダムは神の子である。』と。“このアダムは神の子である。”というは、アダムが神によって造られたということを意味しています。で、イエスはちなみに最後のアダムと第1コリント 15章でそう言われています。最初のアダムが創世記の中に出てくる最初の人間アダムです。イエスは最後のアダムです。最初のアダムは罪を犯して墮落しました。でも最後のアダムは罪を犯さずに、罪を犯したアダムの子孫である私たちのすべての罪を十字架の上で負って、代わりに罰を受けて、代わりに死んで、そして罪の贖いを成し遂げて下さいました。神が人間にならないと贖いの死を遂げることが出来ません。なぜならば神は死ぬことが出来ないからです。『罪から来る報酬は死である。』とローマ 6:23に書いてありますけれども、でもその罪を贖うためには、罪の無い者が代わりに死ななければならないわけです。それが絶対条件です。でも、神である限りは死ねないわけです。死にたくても死ねないわけです。神が死ぬためには人間にならなければいけないわけです。それがイエスというお方です。ですからイエスは間違いなく人間となられたアダムの子であると。辿っていけばマリヤから生まれたということがルカ 3章の系図に出ています。同じ系図でもマタイの福音書 1章の系図は、ヨセフの系統の系図であります。で、ルカの福音書 3章の系図の方は、マリヤの系図です。イエスはヨセフから生まれたんじゃないです。マリヤから生まれたんです。しかもマリヤは処女であったわけです。ですからイエスの父親はヨセフではありません。ヨセフは育ての親で、義理の父親あって、本当のお父さんは天の父であります。聖霊によって乙女マリヤに神の命が宿ったわけです。それがナザレのイエスと呼ばれるお方です。

で、ヨハネの福音書は神の子がテーマだと言いました。ヨハネ 1:1から見て下さい。これは他の三つの共観福音書と違って、非常にユニークな福音書です。ヨハネ 1章 1節に『<sup>1</sup>初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。<sup>2</sup>この方は、初めに神とともにおられた。<sup>3</sup>すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。<sup>4</sup>この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。<sup>5</sup>光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。』これが云わば、神の子としての系図と言って良いと思います。ことばは、キリストのことです。”ロゴス”とギリシャ語で言います。ことばは神とともにあった。父なる神とともにあったんです。でも、ことばは同時に神だったんです。これが三位一体の神を表しています。初めに神とともにおられた方。つくられたお方ではないです。イエスは被造物ではないです。むしろことばによって全宇宙が造られたわけですが、その天地創造の働きにもキリストは関与しているわけです。三位一体の神が天地創造に関わっているわけですが、そのお方がイエスとして二千年前にクリスマスにこの世に来られたわけです。もちろんイエスは12月25日に生まれたわけじゃないです。恐らく秋に生まれたと思います。これは別の話になるので、こ

ここでは避けまされども、いずれにしてもイエスの実体は神であると。

神が人となってイエスということで、ヨハネ 1 章 14 節に『ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。』ことばが人となる。受肉して文字通りは“幕屋を張って”ということばです。私たちの間に住まわれた。旧約聖書の時代、幕屋の中に神の栄光が満ち満ちたわけです。それはすべてイエス・キリストの予型・ひな型だったわけです。ですから、幕屋というのは実はイエス・キリストを詳細に表しています。イエスが実体であって、幕屋が影です。本体がイエスです。

で、ヨハネ 1 章 18 節のところには『いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。』イエスが“ひとり子の神”と呼ばれてます。そしてヨハネ 8 : 24 を見て下さい。『それでわたしは、あなたがたが自分の罪の中で死ぬと、あなたがたに言ったのです。もしあなたがたが、わたしのことを信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです。』“わたしのことを”というところに新改訳聖書では\*印がついております。欄外に目を置いて頂くと、直訳「わたしがあるということ」。出エジプト記 3 : 14 と関連させてキリストが主なる神であることを言われたと解するものが多い。とありますけれども、“わたしのことを”というのを直訳すると「わたしはあるというものである」ということを信じなければ、あなたは自分の罪の中で死ぬのです。それはオリジナルは出エジプト記 3 : 14、燃える柴の中から神がモーセに明かしたその名前。「わたしはあるというものである。」“エヒエ・アシェル・エヒエ”というヘブル語です。それは、ヤーウェという神の個人名、固有名詞の由来でもあります。で、イエスは、ここで正に「自分がそれだ。」と言ってるんです。ギリシャ語では、それを“エゴ・エイミー”と言います。で、「イエスがヤーウェだ。」と信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬ。」と、そうおっしゃってるわけです。これは立派な神宣言です。

で、ヨハネ 8 : 28 節のところも。『イエスは言われた。「あなたがたが人の子を上げてしまうと（上げるというのは、十字架に上げるということです。）、その時、あなたがたは、わたしが何であるか、また、わたしがわたし自身からは何事もせず、ただ父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していることを、知るようになります。』“わたしが何であるか”というところにも\*印が新改訳聖書ですと付いています。これも「わたしはあるというものである。」と、“エゴ・エイミー”という言葉が使われています。実際にイエスが掛けられた十字架の頭上のところには罪状書がありまして、実はその罪状書は『ヤーウェ』と書かれていたわけです。これについては、今は詳しく話すことはしませんが、イエスの頭の上にあったのは、実際に『ユダヤ人の王、ナザレのイエス』その頭文字を拾っていくと、ヘブル語の表記ですと“ヤーウェ”という YHWH という 4 つの神聖文字がそこに浮かび上がっているわけです。ですから、ユダヤ人の宗教家たちはピラトに取り合っ、「これを書き換えて欲しい。そうでないとユダヤ人はそこに“ヤーウェ”と読んでしまうから。“ヤーウェ”が死んだなんてことはあってはいけないことだし、そのように人々が捉えてはいけない。だから書き換えて欲しい。」と言ったんですが、ピラトは「私が書いたことはもう取り消さない。」ということで、『ヤーウェ』のままイエスは十字架に掛かって死なれたわけです。

で、同じくヨハネ 8 : 58 『イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。』これも\*印が付いていて「わたしはあるというものである。」と。“アブラハムが生まれる前から”イエスとしてこの世に来る二千年前の人のがアブラハムです。今から四千年前の人です。もちろんイエスの時代からしても二千年前ですから、そんな二千年前にイエスがアブラハムより前にいたわけがないと。でも、「わたしはあるというものである。」という神であれば当然そこにいたわけです。存在したわけです。

で、ヨハネ 17 : 5 を見て頂くと、大祭司の祈りとして有名なところです。イエスがゲッセマネの園で祈られた祈りです。『今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごい

っしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。』“初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。”と、もう初めからおられたわけです。ですから、アブラハムが存在する前から、天地創造の前から、イエスはキリストとして、神の御子として、子なる神として存在しておられたと。そう表現しているわけです。

ヨハネの福音書の中には、“エゴー・エイミー”宣言というのは豊富にあります。一番良く知られているのは『わたしはいのちのパンです。わたしは世の光です。わたしは羊の門ですとか。わたしは良い羊飼いですとか、牧者ですとか。或いは、わたしはよみがえりであり、いのちです。わたしは道であり、真理であり、いのちです。わたしはまことのぶどうの木です。』みんな有名な宣言ですが、全部それらは“エゴー・エイミー”宣言です。「わたしはあるというものである、いのちのパンです。わたしはあるというものである、世の光です。」というのが正確な訳です。不可解な名前です。「わたしはあるというものである。」でも、それをイエスが明らかにされたわけです。だれもかつて神を見た者はいない。でも、神のふところにおられる子なる神が、この方を、この見えない神を説明されたわけです。

ヨハネ 17:6 には、『わたしは、あなたが世から取り出してわたしに下さった人々に、あなたの御名を明らかにしました。』神の御名。“エヒエ・アシェル・エヒエ”、“エゴー・エイミー”、“ヤーウェ”という神の名前を明らかにしました。それがイエスのミニストリーでもあったわけです。ですから、「わたしはいのちのパンです。」と。神とはいのちのパンなるお方。神とは世の光なるお方。神とは門であり、そして羊の門で、良い牧者であると。そうやって不可解だった“ヤーウェ”という名前をイエス・キリストが明らかにしてくださったわけです。

そしてヨハネ 20:28 (『トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」』)。疑い深いトマス。英語圏では疑い深い人のことを“ダウティング・トマス” doubting Tomas と言います。これは慣用句です。トマスという名前だけでなく疑い深い懐疑的な人を“ダウティング・トマス”と言います。そのくらいトマスという人は、疑い深い人として西洋世界ではもうことわざのような存在になってしまったわけですが、その彼が復活のキリストに出会って、イエスの事を「私の主。私の神。」と。イエスの弟子がイエスをただの人間じゃない。「私の主。私の神。」だと。一番近くにいた人が言うわけですから、間違いないですね。イエスと寝食を共にした人がそう言っているんです。一緒に同じ釜の飯を食ったんです。一緒に旅行したんです。そうしたら大体その人の本当の姿が見えてくるわけです。粗も見えてきます。弱さも分かってきます。たまにしか顔を合わせなかったら、なんと良い人だと思いかもしれませんが、あらためて一緒に旅行したりすると、「こんな人だったのか。知らなかった。」とか、「結婚してみたらこんな人とは思わなかった。」とか、そういうことがあるわけです。でも、イエスとは違うわけです。イエスは宣言通りの方。この人には罪がない。この人はただの人じゃない。この人は「私の主。私の神。」と。

で、ヨハネ 20:31 のところにこの福音書が書かれた目的が書かれています。『しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。』これがヨハネの福音書が書かれた目的です。イエスが神の子キリストであるということ。“あなた方が信じる”と、“あなた方”という読者は誰かといいますと、ヨハネの福音書の読者は、教会です。マタイの福音書の読者は、ユダヤ人です。マルコの福音書の読者は、ローマ人です。ルカの福音書は、ギリシャ人のルカが書いたので、ギリシャ人に向けて書かれています。で、ヨハネの福音書は特殊で、ユダヤ人とギリシャ人とその他の異邦人全部含めたキリストにある兄弟姉妹、神の家族である教会に対して書かれた福音書です。ですから、クリスチャンが学ぶべき福音書はヨハネの福音書であります。でも、私たちはもうイエスが神の子キリストであるということを知っている。なのに、あらためて私たちはこの福音書を通してイエスが神の子キリストであるということ益々信じなければいけません。時に私たちはトマスのようになります。疑ってしまうんです。疑うから心配す

るんです。疑うから恐れるんです。イエスが本当に神の子キリストだと信じている人は、今何の思い煩いもないはずですが、でも、今思い煩いがある人は、イエスが神の子キリストであることを疑っている人です。そういう人はこの福音書を学ぶ必要があります。そして、“**イエスの御名によっていのちを得るためである。**”と。もう救われているじゃないですかと、クリスチャンであればそういうかもしれませんが、そうじゃないです。ここでは、より豊かないのちに入るということを意味しています。救われた者に対して、“**いのちを得る**”と言っているのは、あなたはイエスを信じているかもしれない。でも、永遠のいのちを生きてますか。新しいいのちを満喫していますか。本当にそれを無用の長物としていないでしょうか。宝の持ち腐れにしていないでしょうか。与えられているその永遠のいのちをもっと豊かに効果的にそれを味わい尽くすためには、この福音書を学ぶ必要があります。そうしたらクリスチャンとしての醍醐味をもっと味わうことが出来ますし、もっとダイナミックなクリスチャンライフがこの書を通して皆さんのものとなると。それがこの書の書かれた目的であります。

で、次に『**使徒の働き**』に移りたいと思います。これは 5 つ目ですけれども、旧約聖書を含めれば 44 番目の書です。**使徒の働き**は、これはちょうど福音書とその後に続く手紙・書簡と呼ばれるものの間に位置していますので、福音書と書簡を結ぶ架け橋となる書物と言われてます。その**使徒の働き**は、ルカの福音書を書いたルカが記録したものです。これもギリシャ人によって書かれたものです。殆どはユダヤ人によって書かれたものです。聖書 66 巻の内でも、例外的に『**ルカの福音書**』と『**使徒の働き**』は、ギリシャ人のルカ、医者のルカが書いたものです。中にはルカがユダヤ人だったという人もいますが、少なくともルカはその文体を見ても分かる通り、他の福音書の記者とは違って、非常に流麗な、閑静な、もう歴史文書としては非常に価値の高い、格調高い文体となっています。これはギリシャ人で知識のある人でないととても書けないものです。**マタイの福音書**は、取税人のマタイが書いたもので、記録としてはよくまとまっているとは思いますが、でも他は、ヨハネなんかは漁師ですから、漁師にはあまり期待できないわけですが、でも内容は深いです。霊的な福音書として**ヨハネの福音書**は、他の共観福音書とは違った側面を持っております。

話を戻したいと思います。ルカの福音書も非常によくまとまっている歴史文書。ですから、新約聖書の中では随一の記録文書と言われていたぐらい評価が高いものです。ですから文法とか文体とか文学的な価値も高いものとしてよく知られています。で、その中でイエス・キリストがどのように描かれているかと言いますと、“**よみがえられた世界の救い主**”として描かれています。**4 章 12 節**を見て下さい。『**この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。**』凄いですね。明確にイエス・キリスト以外には救いはないと言っています。仏陀でも信じれば救われるとか、南無阿弥陀仏とか南妙法蓮華経とかいろいろ念仏を唱えれば救われますとか、そうではありません。イエス・キリスト以外には救われるべき御名はないと。いくら阿弥陀佛の名前を唱えたって救われません。ムハンマドによっても救われません。孔子によっても救われません。大川隆法によっても救われません。麻原彰晃・松本智津夫によっても救われません。文鮮明によっても救われません。もう死んじゃいましたが。再臨のキリストを自称しようと、イエス・キリスト以外の名前で救われることはまずないということです。

ですから、イエスはユダヤ人の救い主にとどまらず、イエスは世界の救い主として、この後福音がイスラエルから世界に、この使徒の働きを通して世界に伝播していくところを皆さんは確認できると思います。

次に『**ローマ人への手紙**』いよいよここからが、書簡という内容です。手紙です。パウロによる書簡・

手紙が 13 あります。ただ、**ヘブル人への手紙**は、これは誰が書いたか著者は不明と言われてますが、伝統的にはパウロが書いたのではないかとされています。それを含めたら 14 あるわけです。で、パウロは新約聖書の殆ど三分の二ぐらいを書いています。大半を書いているのがパウロです。もちろんパウロがテーマとしているのも、イエス・キリストです。それは**使徒の働き**の終わりのところにも、パウロのミニストリーが記録されてますが、ちょうど**使徒の働き**は後半からパウロが中心的な働きになっております。前半はペテロがよく出てきましたけれども、そして**使徒の働き**から**ローマ人への手紙**とパウロの書簡に繋がっていくにあたって、これからはパウロが主に新約聖書の中心的人物として描かれていきますが、そのパウロは、**使徒 28:23**では、ちょうど架け橋になっているところを確認して頂きたいと思います。『そこで、彼らは日を定めて、さらに大ぜいでパウロの宿にやって来た。彼は朝から晩まで語り続けた。神の国のことをあかしし、また、モーセの律法と預言者たちの書によって（つまり旧約聖書によって）、イエスのことについて彼らを説得しようとした。』また終わりの 30 節に『<sup>30</sup> こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎えて、<sup>31</sup> 大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。』パウロは旧約聖書を使ってイエス・キリストを伝えたわけです。パウロはそれしか語らなかったわけです。ですから、バイブルスタディーでいったら、新約聖書はまだありませんから、旧約聖書を使ってイエス・キリストを証したわけです。それがパウロを始めとした使徒たちのバイブルスタディーの手法だったわけです。朝から晩まで教えていたわけですから、二時間三時間で音を上げないで欲しいと思います。朝から晩まで、これが私が目指しているところなので、また皆さんにも是非祈って頂きたいと思います。

次に**ローマ人への手紙**に戻りたいと思いますが、**ローマ人への手紙**の中のイエス・キリストは、“**神の義**”そして“**ほめたたえられる神**”とダイレクトに言われています。“**神の義**”というのがローマ書の一大テーマなのですが、それがイエス・キリストご自身であります。で、イエスは“**ほめたたえられる神**”とこの手紙の中では、そう言われています。ローマ 1:1~4。そこを見て頂くと『<sup>1</sup> 神の福音のために選り分けられ、使徒として召されたキリスト・イエスのしもべパウロ、<sup>2</sup>—この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので（旧約聖書の中に福音が書かれているわけです。）、<sup>3</sup> 御子に関することです。（福音は御子に関すること。）御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、<sup>4</sup> 聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。』で、この部分というのは新約聖書が完成する前のローマ人への手紙が書かれる前からあった初代教会の信仰告白の一文だったと言われています。で、この信仰告白というのは、福音書よりも古いものです。パウロの書簡、パウロの手紙というのは、福音書よりも前に書かれています。大体 AD50 年から AD66 年以内には、すべてパウロの 13 の書簡は、ヘブル含めての 14 はその年代にすべて書かれています。パウロは AD66 年にネロによって斬首刑になっています。福音書が書かれているのは、パウロの書簡よりも遅くなっています。ですから、常にこの**ローマの 1 章 1 節から 4 節**ぐらいまでの内容、これはもう初代教会のクリスチャンたちが口を揃えて発していた信仰告白としては、古代のもの、古いもの、福音書が書かれる前からあったもの。そして、**1 章 17 節**のところは主題聖句となっております。『なぜなら、福音のうちには神の義が啓示されていて、その義は、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる。」と書いてあるとおりです。』“福音のうちには神の義が啓示されていて”とあります。さっき読んだところでは、“福音は御子に関することです。”と言われてました。ですから、この“**神の義**”というのは、御子を指すと言っても差し支えないわけです。そして、“**義人は信仰によって生きる。**”と。正に私たちはイエス・キリストを信じて生きるわけです。イエスを信じなければ救われないからです。イエスを信じることによって義と認められ、そして永遠に生きることが出来ます。

で、ローマ 9:5『先祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。』

(人としては、ユダヤ人として、ナザレのイエスとして生まれたと。) このキリストは万物の上にとあり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。』イエス・キリストは神だと言われています。

で、ローマ人への手紙におけるキリストということで、『イラスト早わかり聖書ガイドブック』ではこう言っています。『この書物においてイエス・キリストは第2のアダムとされています。最初のアダムによって罪が世界に入りました。しかし、イエス・キリストは罪の赦しをもたらしました。イエスを信じるすべての人は、罪の赦しと永遠のいのちという神からの贈り物を受けます。イエス・キリストが死んで、もう一度墓からよみがえられたゆえに、私たちは永遠のいのちを持つことができるのです。』第2のアダムという言い方は、ローマ5章の内容です。ですから、そこを読んでみて下さい。

そして、『第1コリント人への手紙』。コリント人への手紙、これはパウロの伝道旅行中に書いたものです。ローマ人への手紙もそうです。ローマ人への手紙は、コリントにパウロがいた時に書いた手紙で、伝道旅行中に書いた手紙です。ローマ書はもちろんローマ教会に宛てた手紙。コリント書は、コリントの教会に宛てた手紙です。第1コリントの方は“病む教会を生かす最後のアダム”としてイエス・キリストが描かれています。第1コリント 15:3~5。ここでは皆さんに紹介したいのは福音の内容です。信仰告白、これも最古の信仰告白の一つです。『<sup>3</sup>私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおりに(旧約聖書の示すとおりに)、私たちの罪のために死なれたこと、<sup>4</sup>また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと(これらは全部旧約聖書に書いてあります。)、<sup>5</sup>また、ケパに現われ、それから十二弟子に現われたことです。』旧約聖書にイエス・キリストの初臨の預言が、イエスがいつ頃どこで生まれるか、いつ頃ユダヤ人の王としてエルサレムに来られるかとか、そしてイエス・キリストが十字架に掛かって死なれて葬られて三日目によみがえるということは、すべて旧約聖書の中に、イエスが生まれる遙か昔に預言されているわけです。300~350以上そうした初臨の預言があって、全部それがナザレのイエスにおいて成就しました。で、これも実は福音書が書かれる前からあった信仰告白です。第1コリントは新約聖書の中でも最古の書物と言われています。福音書より前に書かれた手紙です。ですから、これはイエス・キリストの弟子たちももちろん生きていましたし、イエス・キリストの十字架の死と復活を目撃した人たちが存命中に書かれた手紙です。ですから、非常に価値があるんです。6節のところを見ると『その後、キリストは五百人以上の兄弟たちに同時に現われました。その中の大多数の者は今なお生き残っていますが、すでに眠った者もいくらかいます。』同時に五百人以上の者の前で復活のキリストはご自身の姿を現され、証しされたわけです。でも、その大多数の者は生きている。眠った者というのはもう死んだ者もあると言ってるんですが、ですからどれほど新約聖書が信憑性の高いものか。これがただの作り話だったら、このコリント人への手紙なんてものは、存在し得ないわけです。ただの大衆紙のような扱いです。そんなゴシップ誌なんて、後代に残るはずがないわけです。でも、これが命がけで守られてきたわけです。沢山の写本がお金と時間をかけて、労力をかけて残されてきたわけです。これがただの作り話で何かの週刊誌やスポーツ新聞みたいな程度の作り話だったら、そういうことにはならないわけです。当時は紙なんてものは安いものじゃないです。羊皮紙というものも使われましたが、これは非常に高価なものです。ですから、今みたいにどンドン印刷できるものじゃないということです。全部手書きです。

で、話を戻したいと思いますが、この第1コリント 15:45 に、最後のアダムということでイエスのことが紹介されています。『聖書に「最初の人アダムは生きた者となった。」と(これは創世記2:7に)書いてありますが、最後のアダムは、生かす御霊となりました。』コリントの教会は病んでいました。非常に病的な教会でした。でも、その病的な教会を生かす御霊が最後のアダム、イエス・キリストです。ですから、私は“病む教会を生かす最後のアダム”としてキリストをここに見ます。

そして『第2コリント人への手紙』これも伝道旅行中に教会に宛てた第2番目の手紙です。そこでイエス・キリストは“教会の力、教会の慰め主”として描かれています。第2コリント7:6を見て下さい。『しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちが慰めてくださいました。』この“気落ちした者を慰めてくださる神”とは、イエス・キリストのことです。イエスはあなたにとってもこういうお方です。今あなたは気落ちしていますか。そんなあなたを慰めて欲しいと、それを誰かに求めるかもしれませんが、キリスト以外に求めないで下さい。慰めて欲しいと思って夫に求めたら、あなたが、がっかりします。或いは親とか、或いは子供とか、或いは同僚とか、上司とか、部下とか、友達とか、そういう人に気落ちしたあなたを慰めてもらいたい。身近な人に手っ取り早くと思うかもしれませんが、実際には失望するだけであります。あなたを本当に理解して、あなたに本当に同情して、あなたに最後まで寄り添って下さるのは、イエス・キリスト以外にはいません。心の傷を癒せるのはイエス・キリストだけであります。アルコールだとか、抗うつ薬だとか、薬物で癒そうなんて思わないで下さい。カウンセラーだとか、医者だとか、専門家に癒やしてもらおうなんて思わないで下さい。彼らは神ではないんです。彼らは救い主じゃないんです。彼らはあなたと同じただの人間です。彼らも気落ちするんです。彼らが気落ちしたら、あなたのことなんかどうだっていいんです。ですから、イエス・キリストに是非求めて欲しいと思います。

もう一箇所、第2コリント12:9『しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。』キリストはあなたの力です。キリストはコリントの教会の力です。キリストはこの教会の力です。弱くても強いんです。ですから、弱くなった時、落ち込まないで下さい。その時こそ、キリストの力が発揮される絶好の機会です。最高のチャンスです。自分が強く振る舞っている時は、キリストの力はあまり現れてきません。むしろ、あなたはキリストの力を必要ともしませんし、慕い求めようとはしません。でも、弱くなったらどうでしょうか。「もう私には何も出来ません。もうお手上げです。」その時こそイエス・キリストの出番です。ですから、弱くなるということはそれほど悪いことじゃないんです。何も出来なくなってしまうというのは、それほど悲しいことじゃないんです。皆さんは段々そうなっていくと思います。若い時には出来たことが、出来なくなるわけです。今になったら年寄りの気持ちが分かるという人もあると思います。お年寄りが悩んでいることなんか、若い人には全然分からないわけです。なぜ、こんなトロトロしてとか。同じこと何回も繰り返して言ってとか。こんな小さなことにこだわるのか。とか、いろいろ若い時は年寄りの気持ちが分かりません。でも、年をとったら私たちはそうなるわけです。でも、そういう時に悲観的にならないで下さい。そういう時こそキリストの力があなたを完全に覆うという素晴らしい機会です。これはキリストを知る者でなければ味わえない領域であります。ですから、むしろ若い人でバリバリと出来る人よりも、年老いていろいろ出来なくなってしまった人の方がもっとキリストの力を身近で感じる事が出来る、実感出来るというこれは醍醐味です。ですから年老いるということは悪いことじゃないです。私は年老いることは楽しみにしています。

次に、第2コリント13:4『確かに、弱さのゆえに十字架につけられましたが、神の力のゆえに生きておられます。私たちもキリストにあって弱者ですが、あなたがたに対する神の力のゆえに、キリストとともに生きているのです。』これがクリスチャンです。弱いようでも強いわけです。なぜならば、キリストが私たちの力であるからです。

ちなみに『イラスト早わかり聖書ガイドブック』の方で、「第1コリントの手紙のキリストは、第1コリント15:3,4が上げられているだけです。第2コリントのキリストは、イエス・キリストはパウロをその務めに召された方です。イエスはまたその務めを遂行するパウロを見守られました。イエスは主であり(2

コリント 4:5)、クリスチャンの慰め(2コリント 1:5)である方として示されています。イエスはクリスチャンに力を与えてくださるのです。(2コリント 12:9) この本と同じようなことを私も言っています。

次に、『ガラテヤ人への手紙』。これも伝道旅行中にパウロが書いた手紙で、ガラテヤの教会に宛てた手紙です。そこでのキリストは“自由をもたらす解放者”です。ガラテヤ 5:1 を先に開いて下さい。『キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。』

そして『イラスト早わかり聖書ガイドブック』の方で、ガラテヤ人への手紙におけるキリスト「キリストは人々を神との正しい関係に入れて下さるお方として示されています。ただキリストのみが私たちの罪のためにご自身を与え、その結果私たちをこの世における悪から自由にするのがお出来になるのです。私たちはキリストに信頼しなければなりませんし、また私たちの罪が赦される方法としてキリストが私たちのためにしてくださったことに信頼しなければなりません。私たちは善を行おうとする自分自身の努力に信頼してはなりません。私たちは自分の力で完全になれるほど善良ではないからです。クリスチャンを含めてすべての人は悪いことであると知りながらもそれをしているように感じることがあります。これを誘惑と呼びます。イエスはクリスチャンに特別な力を与えて下さいます。クリスチャンは自分が誘惑された時は、いつでもこの力を用いて正しいことを選び取ることが出来るのです。クリスチャンは罪に負けない自由な者なのです。」

これを中高生が読むわけです。中高生の時からクリスチャンは罪に負けない自由な者だと。今の現代の中高生は沢山の誘惑の中に、危機的な状態に置かれていると言って良いと思います。皆さんが若い時、皆さんが中高生の時とは、わけが違いますので、同じように考えないで下さい。皆さんが想像するよりも、彼らは危険にさらされているということです。もっとおぞましい、恐ろしい罪の中に彼らは引き入れられようとしています。ですから、親としてはちょっと過剰に思うかもしれません。あまりにも干渉し過ぎると世間にはそう思われるかもしれませんが、それくらいしないと守ることが出来ないほど今は厳しい困難な時代になっています。それは、世の終わりはそういう時代だということも聖書が言っていますので、困難な時代だと。ですから、自分たちが中高生の頃、安楽に暮らしていたとか、別に放っておいたって勝手に育つみたいなの、そんな時代じゃないということをもう一度あらためて認識して頂いて、ですからしっかりとチェックして下さい。どういう誘惑があるのか、どういうプレッシャーがかかっているのか。最近も中学生が相次いで自殺しているという報道がなされています。ですから子供たちも苦しんでいるということを是非知って頂きたいと思います。学校に行かせていけばそれでいいというものじゃありません。

で、話を戻したいと思いますが、今度は『エペソ人への手紙』。これはパウロが獄中で書いた手紙です。牢屋の中で書いた手紙。だから“獄中書簡”と言います。で、エペソの教会に宛てられて手紙でありまして、エペソは今のトルコです。で、そこでのキリストは“教会のかしら、花婿”として描かれています。花嫁はもちろん教会です。エペソ 1:23『教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。』これが教会です。教会はキリストのからだであります。私たちはそのからだの一部、からだの器官と言われています。からだの器官であれば、当然からだに属さなければいけません。ですから、クリスチャンと呼ばれる者は必ず教会に属さなければいけません。どの教会にも属していないなんていうクリスチャンは、クリスチャンじゃないと言って良いと思います。それは恐ろしい様です。手も足もバラバラに切り取られている状態で、グロテスクだと言ってるんです。目があちこち転がっているとか、鼻があちらにあるとか、耳が剥がれているとか、バラバラ遺体、バラバ

ラ死体。それが教会に属していないクリスチャンの姿です。とても直視出来ないような悲惨な様です。なのに、私は一人でも礼拝できるとか、どの教会にも行かないで私は家で礼拝できるからそれで十分だとか。とんでもない考え違いです。ですから、教会のかしらはイエス・キリストで、イエスが教会をつくったわけです。教会の制度をつくったのは人間じゃないです。教会のかしらであるイエスがつくったわけですから、そのイエスの弟子である私たちは、しもべである私たちは、その制度に従うべきであって、あなたが好もうと好まざると、好き嫌いの問題じゃないです。あなたのやりたいかやりたくないとか、そういう問題じゃなくて、従属する者としてイエスを主と呼ぶ以上、しもべは文句なしに主に従うわけです。主のおられるところにいるべきです。で、主のおられるのは教会です。キリストのからだ、教会のかしら、そのことばで十分だと思います。で、からだの器官である以上は、必ずからだの中で機能するということです。教会の外で奉仕をするなんてことはあってはいけないことです。必ず教会とセットで、教会を介して、或いは教会に必ず関わるといってその枠内で働かなければいけません。「私は自分の教会には献金しません。でも、他所の宣教団体には献金しますとか。十分の一なんて、こんな教会に誰がやる。」みたいな人をたまに聞きますけれども、教会の一部として、からだの一部として、その器官がからだの外で働くんじゃないで、からだの中でからだに対して働くんであって、私たちもそうでなければいけません。奉仕にしてもそうです。「教会の外ではいろんな奉仕をするけれども、教会の中では何もしません。」これもおかしいですね。どっか不健全だと言わざるを得ません。

で、次にエペソ 5:23『なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。』この後夫婦のことも書かれていて、夫はキリストのようで、妻は教会のようでなければいけません。だから教会はキリストに従うように、妻は夫に従いなさいと。それが気に食わないですという人がいると思いますけれども、でも夫はキリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたようにと。あなたがたも自分の妻を愛しなさいと。夫は命をかけて妻を愛さなければいけないんです。でも、妻は命をかけて夫に従いなさいとは書いてありません。ただ従うべきです。命をかけるのは夫であって、妻ではありません。教会はキリストのために命をかけません。キリストが教会のために命をかけるのであって、教会ではないです。ですから、一番犠牲を払うのは夫です。ですから、勘違いしないで下さい。「私はいつも夫に従ってばかりで、私がいつも泣きを見ていて、私がいつも奴隷奉公して、家政婦のように扱われて。」そうじゃないです。その程度で済めば良い方です。あなたは死ななくていいです。夫は死ななきゃいけないですね。そのことをまたあらためて考えて頂きたいと思います。

エペソ人への手紙におけるキリストとして、『イラスト早わかり聖書ガイドブック』ではこう紹介しています。「信じる者として私たちはキリストにあるもの(エペソ 1:1)。神に選ばれた者(エペソ 1:7)。大いなる望みを与えられた者(エペソ 1:12)。そして神の子供としてキリストにあって成長し続ける者です。(エペソ 2:21)。これはクリスチャンのアイデンティティーのことを言っています。イエスを死者の中からよみがえらせたのと同じ力を神は私たちが得られるようにして下さいました。というのは、神は自分の罪の中に死んでいた者たちに真の命をもたらしてくださったからです。イエスを信じる者はすべてキリストのからだである教会の部分です。イエス・キリストは心が燃やされるだけでなく、私たちの天のお父様である神に喜ばれる生活を送ることを可能にして下さいます。」

そして、『ピリピ人への手紙』。喜びの書簡と言われています。ここでは、やはり獄中書簡です。獄中の中でパウロは書いたんです。でも、喜びの書簡です。そこがミソです。何も悪いことをしていないのに。ただ、イエス・キリストのことを宣べ伝えたただけなのに、投獄されたわけです。でも、ピリピ人への手紙では喜びが爆発しています。牢屋の中で喜びが爆発しているわけです。賛美しているわけです。で、ピリピの教会に宛てられた手紙です。そこでのキリストは“喜びをもたらす全ての者の主”という姿です。ま

ずピリピ 2:6~11 を見て、これは新約聖書がまだ完成する前から既にあった、やはり古い信仰告白であり、古い賛美歌です。初代教会の中で歌われていた賛美歌の一節だと思います。『<sup>6</sup>キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、<sup>7</sup>ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。<sup>8</sup>キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。<sup>9</sup>それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。<sup>10</sup>それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、<sup>11</sup>すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。』という信仰告白、という賛美歌を当時は歌っていたわけですから、今読んだところはイザヤ 52:13 (『見よ。わたしのしもべは栄える。彼は高められ、上げられ、非常に高くなる。』) ならびにイザヤ 45:23 (『わたしは自分にかけて誓った。わたしの口から出ることばは正しく、取り消すことはできない。すべてのひざはわたしに向かってかがみ、すべての舌は誓い、』)、そこが元になっています。ですから、この信仰告白は旧約聖書から取られているということです。そこにイエスが主だと言われているわけです。で、喜びについてはピリピ 4:4 に『いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。』獄中にいても、主にあれば喜べるんです。切羽詰まっても主にあれば喜べます。袋小路でも主にあれば喜べます。鎖につながれ身動き取れない状態でも主にあればあなたはどこでもいつでも喜べるわけです。「いつも、そんなの無理です。」と。主になれば無理です。でも、いつも主にあれば喜べるんです。別に喜ぼうと思わなくても、主にあるだけであなたは喜び始める。喜べない理由がなくなるわけです。主にあれば、喜べない理由はもうないわけです。主にないからあなたは喜べないんです。主になくて、いろんなものの中に自分の身を置こうとします。自分の感情の中とか、自分の切なさの中とか、自分の現実の中とか、自分の環境の中とか、人間関係の中とか。だからあなたは喜べないわけです。

で、ピリピ人への手紙におけるキリストとして、『イラスト早わかり聖書ガイドブック』はこう言っています。「パウロはピリピの人々に彼の人生におけるただ一つの目標は、彼の主であるイエス・キリストに仕えることであると語りました (ピリピ 1:21)。この手紙においてパウロは、私たちが従うべき模範としてのキリストを示しています (ピリピ 2:5)。[ご自分を無にして仕える者の姿をとったと。実に十字架の死にまでも従ったという模範です。]パウロはイエスに信頼することによってどんなことでも出来ると語っています。」これがピリピ 4:13 です。(『私は、私を強くして下さる方によって、どんなことでもできるのです。』) 素晴らしい聖書の言葉です。「出来ません。」とはクリスチャンは言いません。みこころならば何でも出来ます。あなたの力では出来ないところは、あなたを強くして下さる方によって何でも出来る。あなたの能力なんて度外視して、そう言って良いわけです。「私にはそんな才能もありません。そんな訓練も受けてません。そんな知識も無いです。そんな経歴も無いです。」それは一切問われません。あなたを強くして下さる方が誰か。それだけです。主にあればあなたは喜べます。主にあればあなたは何でも出来るんです。だから、自分自身を見ないで下さい。自分の足元を見ないで下さい。自分の持ち物を見ないで下さい。自分の能力を見ないで下さい。もちろん周りも見ないで下さい。後ろも見ないで下さい。キリストだけを見て下さい。そうすれば、そこから喜びが湧いてきます。

次に『コロサイ人への手紙』。これも獄中で書かれた手紙で、コロサイの教会に宛てられた手紙です。そこでのキリストは“教会を満たす全ての支配と権威のかしら”です。コロサイ 1:15~17 をまず開きます。『<sup>15</sup>御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。<sup>16</sup>なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子の

ために造られたのです。<sup>17</sup> 御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。』エホバの証人によれば、御子は、キリストは大天使ミカエルだと。ミカエルが人間の姿をとったのがイエスだと言ってます。王座も主権も支配も権威、これらは御使いの位のことを特に指します。それもイエスによって造られた。イエスはサタンを造ってませんが、サタンの前身である光の御使いルシファーを造ったわけです。明けの明星、暁の子と呼ばれる。でも、それが墮落して高慢の罪で墮天使となつて、サタン・悪魔と呼ばれたんです。で、その手下が御使いの内の三分の一、彼らはサタンに従つて悪霊となつたわけです。ですから、元々は御使いとして存在していたんですが、イエスは御使いのひとりじゃないです。ルシファーのライバルのミカエルでも何でもありません。モルモン教では、ルシファーのお兄さんがやはり天使としてイエスだと言っていますけれども、全部異端です。イエスを神としないものは、全部カルト、異端であります。で、もちろんイエスは神だけじゃなくて、100%神であり100%人であります。私たちの理解を超えたお方です。フィフティ・フィフティじゃないです。半分神様で半分人間、そういうギリシャ神話に出てくるような存在じゃありません。同じにしてはなりません。

で、もう一箇所、**コロサイ 2：9～10**『<sup>9</sup>キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。<sup>10</sup>そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです。』教会を満たす全ての支配と権威のかしらがキリストだと。

で、『イラスト早わかり聖書ガイドブック』では、コロサイ人への手紙におけるキリストは「この手紙は、キリストは全てのものを支配される主であることを教えています。キリストは造られた全てのものの主です（コロサイ 1：16～17）。キリストは私たちが正しいことを行えるように助けて下さいます（コロサイ 1：10）。またキリストは教会のかしらです（コロサイ 1：18）。」大体同じことを言っています。

次に『**第1テサロニケ人への手紙**』。これは教会に宛てられた手紙、パウロの伝道旅行中に書いたものです。“携挙により慰めを与えるキリスト” **第1テサロニケ 4：13～18**『<sup>13</sup>眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。（キリストにあって亡くなった者たちです。）あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。（ノンクリスチャンは他の望みのない人々です。ですから、他の望みのない人々ようになってはいけません。）<sup>14</sup>私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずですよ。<sup>15</sup>私たちは主のみことばのおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。<sup>16</sup>主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下つて来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、<sup>17</sup>次に、生き残っている私たちが、（それが今日もし携挙があったら、生き残っている私たちは、ここにいる皆さんということです。）たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。（これが携挙ということです。）このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。<sup>18</sup> こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。』携挙によって慰めをもたらすのは私たちのキリストです。

『イラスト早わかり聖書ガイドブック』では、こう言っています。「パウロは、イエス・キリストは未来に関する私たちの希望であると教えました。イエス・キリストはもう一度おいでになります。キリストに信頼する者たちにとってその日は喜びの日なのです。」

で、『**第2テサロニケ人への手紙**』。これも伝道旅行中に教会に宛てた手紙で、“再臨によって反キリストを滅ぼすキリスト”。『再臨』これは“携挙”と違って、再臨というのは地上再臨です。携挙は空中再臨とも言います。その後患難時代が7年間この地上に訪れます。キリストを拒絶した罪の世界に、神の怒り、

子羊の怒りが注がれる 7 年間の時代。それを患難時代と言います。その患難時代の終わりにハルマゲドンの戦い、人類の最終戦争があって、その時にイエスが天から地上に降り立ちます。それを地上再臨と言います。それによって反キリストを滅ぼすということが**第 2 テサロニケ 2：8**に書いてあります。『**その時になると、不法の人が現われますが（不法の人というのが反キリストです。）、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。**』ですから、一息で簡単に壊滅させてしまうという力ある再臨の主ということです。ですから、皆さんも信じて頂きたいと思います。あなたの敵は強大かもしれませんが、イエスにとってはたった一息で終わる話です。ですから、私はイエスを主としている限り、敵は最早敵ではないということです。目の前に立ちはだかるものがどれほど強大に見えても、イエスとは比べものにはならないということを知っていただきたいと思います。

そして、こちらの『イラスト早わかり聖書ガイドブック』では、こう言っています。「パウロはイエス・キリストの再臨について教えました。そのことを考えることは信じる者にとっては喜ばしいことです。もし、あなたが自分はクリスチャンであることに確信がないなら、この本の最後の章を読んでみてください。そこにどのようにすれば神の家族の一員になれるかを知る助けを見つけることが出来ます。」

次に、『**第一テモテへの手紙**』。これはパウロの弟子、後継者、ですからこれは個人に宛てた手紙です。教会ではなくて、個人宛の手紙で“**牧会書簡**”という分類になります。牧会というのは牧師に宛てる手紙なので、牧会書簡。若い牧師のテモテに宛てた手紙。そこでのキリストは“**神と人との仲介者、信者の模範としてのキリスト**”として描かれています。**第 1 テモテ 2：5**『**神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。**』**第 1 テモテ 3：16**。ここも初代教会の信仰告白、賛美歌の一つと言われています。『**確かに偉大なのはこの敬虔の奥義です。「キリストは肉において現われ、霊において義と宣言され、御使いたちに見られ、諸国民の間に宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。」**』“キリストは”というところに\*印がついています。これは異本『神』とあります。写本が異なる本は、『**神は肉において現れ**』その方が分かりやすいですね。受肉した神がキリストであります。ですから、イエスは神だということはここでもハッキリ宣言されています。

で、**第 1 テモテ 4：12**『**年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。かえって、ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい。**』と、パウロが弟子のテモテにそう教えています。究極の模範はもちろんイエス・キリストであります。信者の模範、それは隣の人じゃありません。信者の模範はイエス・キリストであります。ですから、隣の人と比べて「自分はまだマシだ。」なんていうところで現状維持しないで下さい。或いは自己満足しないで下さい。信者の模範はイエス・キリストであります。まだまだ先です。まだまだ上です。で、成長し続ける者がクリスチャンになります。栄光から栄光へとキリストの似姿に変えられていきます。

『**第二テモテへの手紙**』の方も同じく牧会書簡で、同じく個人に宛てたもので、“**義の栄冠をくださる正しい審判者**”としてイエスが描かれています。**第 2 テモテ 4：8**『**今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。**』“**主の現われを慕っている**”これは携挙を慕い求めている者には、誰でも義の栄冠をくださる。「主よ、来てください。マラナサ」と祈っている人たちには必ず義の栄冠が主から頂けます。「私にはそんな義の栄冠をもらえる自信がありません。」と思っているかもしれませんが、“**主の現われを慕っている者には誰でも**”です。例外なくです。もちろんあなたがイエス・キリストなんて来てもらったら困るなんて思っていたら期待できないかもしれませんが、でも来て欲しいと願っているならば、必ず義の栄冠が主から直接あなたにくだされます。叙勲とか、

天皇陛下から何かもらう、国民栄誉賞をもらうとか、オリンピックでメダルをもらうとか、そんなレベルじゃないです。主から義の栄冠を頂ける。素晴らしいですね。ですから、楽しい話であります。

で、『イラスト早わかり聖書ガイドブック』では、「パウロはイエス・キリストは私たちの救い主であり、また主であるとテモテに語りました。イエスは死人の中からよみがえって私たちに永遠の命を与えてくださいました。私たちはやがておいでになるイエスを待ち望まなければなりません。」

次に『テトスへの手紙』。これも牧会書簡でテトスという個人に宛てています。テトスもテモテと同じようにパウロの若い後継者です。“祝福された望み、大いなる神”それがキリストであります。テトス 2:13 『祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望むようにと教えさとしたからです。』“祝福された望み、大いなる神”それがイエス・キリストであります。やはり、その栄光ある現われを待ち望むようにと教えている。携挙を待ち望むようにと教えている。それがパウロの教えです。

で、『イラスト早わかり聖書ガイドブック』では、「パウロは、イエス・キリストが私たちの救い主であり、また主であると、テトスに語りました。キリストは永遠の命を持つことが出来るように私たちの身代わりに死んで下さいました。このことは私たちの心を感謝で満たし、キリストのために働くことをたまらなく心躍るものにするはずです。」

次に『ピレモンへの手紙』。これは獄中書簡であります。これはパウロがピレモンという友人に宛てた親書であります。親展扱いの手紙と言って良いと思います。ピレモンへの手紙、非常に特殊な手紙です。非常にパーソナルな手紙です。パウロの人となりがにじみ出ているような手紙と言って良いと思います。ここでは“益と元気をもたらすキリスト”。ピレモンへの手紙は1章しかないの、20節を見て下さい。『そうです。兄弟よ。私は、主にあって、あなたから益を受けたいのです。私の心をキリストにあって、元気づけてください。』キリストにあって元気づけられる。素晴らしいですね。特に獄中にいるパウロにはそれが必要でした。

で、『イラスト早わかり聖書ガイドブック』では、「ピレモンへの手紙の物語で、パウロとオネシモの関係は神がどのようにして私たちの罪を赦すことが出来るかを思い起こさせてくれます。オネシモは悪いことをして自分を主人から引き離していました。オネシモは、ただパウロは自分から進んで彼が犯した罪の代価を支払おうとしてくれたので、家に帰ることが出来ました。私たちの罪は私たちを神から引き離します。私たちは、ただイエスが自分から進んで私たちの罪の代価を支払って下さったことのゆえに、神のもとに帰ることが出来るのです。」

次に『ヘブル人への手紙』。そこでは“メルキゼデクの位に等しい大祭司”としてのキリストです。ヘブル 1:3 から見て下さい。『御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。』まずここで注目して頂きたいのは、「御子は、イエス・キリストは、神の本質の完全な現われ」とあります。この“完全な現われ”という言葉は“カラクテール”というギリシャ語で、硬貨、コインとか肖像の上書きがその製造機の鋳型と正確に一致する時に使われる言葉です。硬貨や肖像の上書きがその製造機の鋳型と正確にピッタリ一致すると同じように、神と神の御子はピッタリ一致するんだという、そういう言葉です。それが“カラクテール”です。だから、イエスを見れば父が見えるわけです。これはイエスがヨハネ 14 章でピリポに対して「わたしを見た者は、父を見たのです。」と仰いました。また「わたしと父はひとつです。」と。それは本当に正確に一致するという事です。“似ています”ではな

いんです。細部に渡ってパーフェクトに一致している。イエスを見れば父なる神が正確に分かるということです。だからイエスは神なんです。

で、同じようにヘブル 1:8 を見て頂くと『御子については、こう言われます。「神よ (イエスは神です)。あなたの御座は世々限りなく、あなたの御国の杖こそ、まっすぐな杖です。』御子は神と。エホバの証人に伝えて欲しいと思います。ヘブル 6:20 にメルキゼデクが出てきます。『イエスは私たちの先駆けとしてそこにはいり、永遠にメルキゼデクの位に等しい大祭司とされました。』メルキゼデクについては 7 章を見て下さい。詳しく紹介されています。ですから、ここでは割愛します。創世記の中にまず出てきます。アブラハムの前に出てきます。イエス・キリストはアブラハムよりも前に存在していたわけです。メルキゼデクという姿で、受肉前のキリストで現れたわけですが、イエスは大祭司。大祭司は本来レビの家系でなければいけません。でも、イエスはユダ部族です。でも、ユダ部族が大祭司となるには、これはウルトラ C がなければいけません。レビ族にはなれないわけです。でも、それを越えたレビ系の大祭司の制度を越えたメルキゼデクの位に等しい大祭司。エルサレムの王であり祭司であると。王であり祭司であるということは、これはレビ系ではありえないことです。イエスはキリストで、王であり、祭司であり、預言者です。この三つの職を兼ね備えるのはたった一人ナザレのイエスだけです。かつて誰もいませんでした。ですから、メルキゼデクなんて名前は聞いたことが無いという人は、これを機に是非ヘブルの 7 章もそうですけれども、創世記からも学んで頂きたいと思います。むしろ、ヘブル 5:10 を見て頂くと『<sup>10</sup>神によって、メルキゼデクの位に等しい大祭司となえられたのです。<sup>11</sup>この方について、私たちは話すべきことをたくさん持っていますが、あなたがたの耳が鈍くなっているため、説き明かすことが困難です。<sup>12</sup>あなたがたは年数からすれば教師になっていなければならぬにもかかわらず、神のことばの初歩をもう一度だれかに教えてもらう必要があるのです。あなたがたは堅い食物ではなく、乳を必要とするようになっています。』皆さんはもう教師です。なぜそう言えるかということ、イエスの弟子たちも三年半で教師になりました。ですから、クリスチャンとして三年たったら、もう教師にならないといけません。メルキゼデクについて知らないなんてことは、あってはいけないことです。知らない人は、まだ乳しか飲んでいない、離乳食から離れられない人です。おしゃぶりをしているベビークリスチャンです。「もう私は 30 年経ちますけれどもメルキゼデクなんていうのは初めて聞きました。」なんて人は残念な人です。まだ幼子であると。その後を読んで頂くと分かります。

で、次に『ヤコブの手紙』。ここから“共同書簡”と言います。なぜ“共同書簡”かと言うとこれは特定の教会に宛てられたというよりも、不特定多数の教会に宛てられた回覧板のようなものとして回し読みされたわけです。他の教会宛の手紙もちろん回し読みされたんですが、特に共同書簡というのは特定の宛名がついていません。ヤコブの手紙というのは、主の兄弟ヤコブの書いたものです。主の兄弟というのは、イエスの義理の弟のヤコブです。使徒ヤコブではありません。ヤコブのお父さんはもちろんヨセフです。ヨセフとマリヤの間に生まれた最初の子はヤコブです。そのヤコブは復活のキリストを信じたわけです。で、彼は特にユダヤ人にこの手紙を書きました。“生きた信仰をもたらずキリスト”というのがこの手紙のテーマです。ヤコブ 2:17『それと同じように、信仰も、もし行ないがなかったなら、それだけでは、死んだものです。』生きた信仰をもたらずのは、イエス・キリストであるということ。その後を読んで頂くとイエス・キリストのことがかいてあります。信仰に行ないが伴うというところに、イエス・キリストのことが出てきますので、創世記 22 章のアブラハムがイサクをささげたというところ、そこは行いの伴う信仰です。130 歳のアブラハムが 30 歳のイサクをささげるんです。小さい子どもをささげたんじゃないんです。大の大人をヨボヨボの爺さんがささげたんです。ということは、イサクは自ら縛られて、抵抗しないで、それで祭壇に上がったのはイサクです。ぐるぐる巻きにされた、<sup>オマキ</sup>實巻にされた 30 代の若者を 130 歳のお

爺さんが持ち上げて祭壇に乗せることなんか出来ません。ですから、イサクは自ら進んで祭壇に上がったんです。それはイエスが自ら進んで十字架に上がったのと同じです。父の愛がそこに示され、子の従順がそこに示され、それは父なる神とイエスのひな型です。そこで行いの伴う信仰についてのレッスンを教えられています。ちょっと時間の関係上、もう本からの引用は止めますけれども、また参考までに皆さんも活用して頂きたいと思います。中高生向けのベーシックな内容ですけれども、大人も良いかと思います。読んでない方は、一回見て下さい。

で、『ペテロの手紙第1』。これも公同書簡です。特にこれは迫害下にあるクリスチャンに宛てられた手紙です。迫害されているなど、そういう思いをされている人は是非**ペテロの手紙第1**を読んで下さい。バビロンに宛てられていると書いてありますが、バビロンというのはおそらくは文字通りのバビロンというよりも、ローマのことを言っている隠語だと思います。敢えてローマと言わないで、迫害されているのでバビロンと言い換えていると思われます。いずれにしてもこれは公同書簡なので回し読みされたわけです。“**苦難を喜びに変える大牧者**”というのがここでのテーマです。苦難を喜びに変える大牧者、キリスト。第1ペテロ4:12~13『<sup>12</sup>愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、<sup>13</sup>むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。』そして第1ペテロ5:4に『そうすれば、大牧者が現われるときに、あなたがたは、しばむことのない栄光の冠を受けます。』大牧者キリストです。苦難を喜びに変えて下さるのは大牧者だけです。

で、『ペテロの手紙第2』も公同書簡です。そこでは“**純真な心を奮い立たせ、忍耐を与える主**”それがキリストです。第2ペテロ1:1『イエス・キリストのしもべであり使徒であるシモン・ペテロから、私たちの神であり救い主であるイエス・キリストの義によって私たちと同じ尊い信仰を受けた方々へ。』ハッキリとイエス・キリストは私たちの神であり救い主であると言われています。そして第2ペテロ3:1『愛する人たち。いま私がこの第二の手紙をあなたがたに書き送るのは、これらの手紙により、記憶を呼びさまさせて、あなたがたの純真な心を奮い立たせるためなのです。』純真な心を奮い立たせて忍耐を与える主として出てきます。これが手紙の書かれた目的です。純真な心を奮い立たせて、その苦難、迫害に耐えて、忍耐を与えるお方、キリストとして描かれています。

そして次に『ヨハネの手紙第1』これも公同書簡です。回し読みされた回覧板です。エペソの教会に特に宛てられたと考えられています。晩年ヨハネはエペソで過ごしました。最初はパトモス島という所に島流し、流刑になったんですが、そこで彼は奇跡的に生存を許されて、そしてエペソに戻ることが叶います。そしてエペソで晩年を過ごすんですが、そこではイエスの母マリヤも一緒に過ごしたと言われています。で、そこには老若男女が集まっていました。ですから年寄りにも若い者たちにも両方に宛てて書かれています。そういうことが見て取れます。で、第1ヨハネは“**義なる弁護者、まことの神、永遠のいのち**”としてのキリストが描かれています。義なる弁護者。弁護士とも訳せる言葉です。第1ヨハネ2:1『私の子どもたち。(恐らく90代のヨハネが若い人たちに、私の子供たちと呼び掛けています。)私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の御前で弁護して下さる方があります。それは、義なるイエス・キリストです。』あなたには弁護士がついています。無料です。24時間相談にのってくれます。そして、まことの神、永遠のいのちについては第1ヨハネ5:20『しかし、神の御子が来て、**真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださった**

ことを知っています。それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。』イエス・キリストこそまことの神、永遠のいのちです。

で、補足として第1ヨハネ5:7には、そこには何も\*印がついていませんが、本来つけてもらいたいところです。写本が異なる異本として第1ヨハネ5:7には、実は異本には『天において証しするものが3つあります。父と、ことばと、聖霊です。これら3つがひとつです。』という写本があります。それは英語の欽定訳聖書、King James Version とか、或いは新欽定訳聖書、New King James Version にはそのように出ています。本来それはあったと思います。三位一体の神がこれほどハッキリ描かれています。父、ことば（それはロゴスであるキリストです。ことばというのはヨハネの福音書を書いた同じ著者なので分かりやすいですね。キリスト）、聖霊です。

で、8節は『地において証しするものが3つあります。それが霊と水と血です。これら3つはひとつとなるのです。』と、その部分は殆ど同じですけれども、そういう異本があるわけです。で、そちらの方が恐らく原典に近いものだと思います。その根拠は今言いませんけれども、そう私は考えています。

で、『ヨハネの手紙第2』。これも公同書簡です。第2ヨハネは非常に面白いもので、宛先が1節のところに『長老から（これはヨハネのことです）選ばれた夫人たちとその子どもたちへ。』非常に個人的な内容に思うかもしれませんが、選ばれた夫人というのはギリシャ語では“エレクトアクュリア”これは“エレクトア”夫人とも訳せます。“キュリア”というのは“クーリオス”『主』という意味でもあります。女性ですと、夫人ですと、主人の妻のことを“キュリア”と言います。“エレクトア”という名前にもとれるわけです。それが選ぶという。でも、それは恐らくは女性名詞で“教会”を指すのではないかとされています。教会はキリストの花嫁で、ですから選ばれた夫人とその子どもたちへ。文字通りエレクトア夫人に宛てたものかもしれません。その子ども家族に宛てたかもしれませんし、神の家族に宛てた、教会に宛てた手紙。恐らくその方が妥当かと思えます。そこでは“教会を愛する受肉されたキリスト”です。1:1『長老から、選ばれた夫人とその子どもたちへ。(当然夫はキリストです。)私はあなたがたをほんとうに愛しています。私だけでなく、真理を知っている人々がみな、そうです。』7節に『なぜお願いするかと言えば、人を惑わす者、すなわち、イエス・キリストが人として来られたことを告白しない者が大ぜい世に出て行ったからです。こういう者は惑わす者であり、反キリストです。』愛しているがゆえに警告も与えているわけです。

そして『ヨハネの手紙第3』。これも公同書簡で、宛先は“愛するガイオへ”と1節にあります。ガイオ、これは個人名です。エペソ教会のリーダーがガイオです。そのガイオに宛てた手紙です。でも、公同書簡なのでこれも回し読みされたわけです。内容は個人的な内容ではありません。教会の代表としてガイオの名前が挙げられていますが、これは教会全体に語っているものです。“教会の幸いと健康を祈るキリスト”2節『愛する者よ。あなたが、たましいに幸いを得ているようにすべての点でも幸いを得、また健康であるように祈ります。』イエス・キリストは健康であるようにも、幸いを得るようにも、あなたのために私のために祈っていて下さいます。

で、『ユダの手紙』。これも公同書簡で、これも主の兄弟ユダです。ヤコブの弟です。“教会をつまづきから守るキリスト”これも1章しかありません。24節にこのことが書いてあります。『あなたがたを、つまづかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方』これがキリストです。あなたをつまづきから守ってくださるのがキリストです。

最後に 66 番目の書。新約の 27 番目の書。それが『ヨハネの黙示録』です。これは 7 つの教会に宛てられました。エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキヤの 7 つの教会、今のトルコにあった町々です。実在の町々です。そこでは“アルファであり、オメガ、最初であり、最後である方”としてキリストが描かれています。まず 1 章 1 節を見て下さい。『イエス・キリストの黙示。』正確にはヨハネの黙示録ではなくて、イエス・キリストの黙示録です。イエス・キリストの黙示。黙示ということばは“<sup>あば</sup>暴く”という意味です。“ベールをはがす”という意味です。“暴露”と言って良いと思います。イエスの暴露本、これがヨハネの黙示録です。イエスの本当の姿を知りたいければ、ヨハネの黙示録が一番適しています。これが天で見るイエスの姿です。で、2 節『ヨハネは、神のことばとイエス・キリストのあかし、すなわち、彼の見たすべての事をあかした。』神のことばとイエス・キリストのあかし。それがヨハネの黙示録の内容です。9 節も見て下さい。『私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者であって、神のことばとイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。』ヨハネは他の弟子と違って、弾圧されましたけれども殉教はしなかったんです。処刑によって死ぬことはありませんでした。伝承によれば、沸騰した油がまの中に投げ入れられたにもかかわらずヨハネは無傷で出てきて、そのヨハネを恐れて遠くに流したんです。それがパトモス島という人が住めない孤島です。そこで野垂れ死にするはずだったのですが、ヨハネは生き延びてこのあとヨハネの手紙をさっき言った通りエペソで書いたと考えられます。ですから、もうこの時晩年です。90 代です。90 代でも現役です。ですから皆さんも、もう年だなんて思わないで下さい。恐らく 100 歳まで生きたと思われます。100 歳を超えたと思います。最期まで現役で一生現役でヨハネは働きました。そういう意味では殉教したんです。若い年齢でこの世を去ることはなかっただけで、90、100 歳で最期まで働いて、最期まで神のことばとキリストの証しのゆえに生きて、そのために死んだわけです。そういう意味では殉教者と言って良いと思います。

で、22 章、最後のところ、13 節。そこにイエス・キリストがアルファ、オメガ。ギリシャ語の最初のアルファベットと最後のアルファベット。日本語言えば“あ”“ん”です。『わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。』これが繰り返し繰り返し 1 章にも出ています。終わりの 22 章にも出てきます。イエス・キリストの証しですから、最初と最後同じことが書かれていても不思議ではないですね。この“最初であり、最後である。”ということばは、イザヤ書にもよく出てきて、いわゆる父なる神が最初であり最後であるという言い方がイザヤ書に出てきます。ですから、旧約聖書を知っている人であれば、これは神が言っているんだと。でも、ここでは明らかにイエスがそう言っているので、イエスはイザヤが預言したあの父なる神と同じお方だということが分かります。若しくはイザヤ 6 章を見て頂くと主の栄光を見たわけですが、それはキリストの栄光を見たヨハネの 11 章にはそう書いてあります。ヨハネの福音書によればイザヤが 6 章で見た神々しい幻は、イエス・キリストの栄光の幻だったと。ですから、イザヤ書の中で初めであり終わりであると宣言されている主は、イエス・キリストというふうにも考えられます。いずれにしても父とイエスはひとつですから、同じことを述べて然るべきであります。

で、これで今日は終わりたいと思います。ちょっと大慌てで申し訳ありませんでしたが、聖書の 3 分の 1 が預言です。ですから、最後は黙示録で閉じられていますけれども、預言書で終わっています。旧約聖書の 23,210 節の内 6,641 節にあたる 28.5%が預言の内容です。新約聖書の 7,914 節の内 1,711 節にあたる 21.5%が預言です。トータルで聖書 66 巻は 31,124 節ありますが、その内の 8,352 節にあたる 27%が預言です。だから凡そ 3 分の 1 が預言だということです。この内 300 以上が初臨 (first coming) の預言。1,500~1,800 以上が再臨 (second coming) の預言だと。その再臨の預言は新約聖書の中に 318 ありま

す。新約聖書の 30 節ごとにキリストの来臨の預言がなされています。この再臨の中には空中再臨も含めて  
ます。携挙と地上再臨。新約聖書を読んでいて 30 節ごとに携挙のことだとか再臨のことが出ています。な  
のに私たちはあまりそのことは考えもしません。待ち望もうともしない。それは聖書を読んでいない証拠  
です。聖書を読んでいる限り、もう目に飛び込んでくるわけです。考えないわけにいかない、意識しない  
わけにいかないわけです。教会の名前もそうですから意識して下さい。“マラナサ”というのは「主よ、来  
て下さい。」ということですから。MGF と便宜的に言うかもしれませんが、マラナサということは是非強  
調しておきたいと思います。新約聖書 27 巻中の 23 巻はキリストの再臨をダイレクトに預言しています。  
50 回以上イエス・キリストの来臨に備えるようにと勧告されているわけです。内村鑑三はこう言いました。  
「キリストの再来こそ新約聖書のいたるところに高唱する最大真理である。聖書の中心的真理はすなわち  
これである。」イエス・キリストが戻ってこられる。これが聖書の最大真理だと内村鑑三は言いました。そ  
れは新約聖書のいたるところにある。その通りです。30 節ごとに書いてあるわけですから。これが新約聖  
書です。あらためて見方が変わったかもしれませんが。視点も変わったかもしれませんが。でも、一貫してテ  
ーマはイエス・キリストであることは聖書 66 巻貫かれていますから、イエスを知るために旧約聖書を読ん  
で下さい。そこにも再臨の預言はもちろん出ています。新約聖書は言うまでもないことです。是非これか  
ら聖書の読み方を 66 巻ひとつの書物としてバラバラに読まないで、偏って読まないで、そして同じテー  
マをもって、イエス・キリストを知るという目的をもって、ますます聖書に取り組んで頂きたいと思い  
ます。では今日はこれで終わりたいと思います。